

“望んでいること”と“望ましいこと”

教育研究所所長 佐伯 胖

人が何かを“望んでいる”ということ(“what is desired”)から、それが“望ましい”こと(“what is desirable”)とすることはできない。このことは認識論哲学の基礎中の基礎、誰もが認める公準ですが、G. E. Moore は、近代の人間科学、社会科学の多くは、その二つを同一視して“望んでいること”から“望ましいこと”を平気で導き出しているが、それは誤謬(“自然主義的誤謬”)であると指摘しています(G. E. Moore. *Principia Ethica*, Cambridge University Press, 1903)。

それでは、“望ましいこと”はどこから導き出せばいいのでしょうか。慶應義塾大学名誉教授の村井実氏によると、それは「“何かから導く”こと自体、できない」ことであり、それは古代ギリシャのソクラテスが「“善さ”は本来、定義できない」としたことと同じだということです。それでは私たちはどうすればいいのでしょうか。何らの指針も規範もなく、ただデタラメに生きていけばいいのでしょうか。

村井先生は、私たちは「他者とともに生きる」という間柄的関係のなかで、互いの“訴え”を聴き合う存在であるとして、その“訴え”の相互交渉(“対話”)を通して「互いにとって“善い”こと」に向かうことが、人間が人間として生きるということだとされています。

ところで、学校の教室には、「何を考えているのか、わからない」子がいます。勝手なことを勝手にやって人を困らせる子、ちょっとしたことですぐキレて暴力をふるう子、「みんなと一緒にやること」には絶対入らない子…。そういう子どもには、どうにも手のつけようがなく、途方にくれてしまうでしょう。

子どもが暴力を振るったり、ものを壊したりするのは、「自分の存在を認めてほしい」という「自己存在性の訴え」であったり、「自分だって、外界に“変化”をもたらせる」という「自己原因性の訴え」であったりします。それは彼ら／彼女らが、そういう「自己存在性」や「自己原因性」を否定され、拒否されてきているから、まずその「訴え」を「欲求」として出しているのです。そのレベルでは、まだ「他者とともに生きる」という前提がありません。

「あなたはこの世に存在してよい」こと、「あなたがあなた自身であっていい」こと、「あなたは、なにか“善いこと”の原因になれること」を、あらゆる機会に当人に気づかせることから始めるしかありません。それを根気よく伝えていく中で、「あなたの傍らには、つねに私がいる」という、「傍らの人」になることに徹してください。そうすれば、いつか、「私たちは、“ともに生きる”存在であること」に気づく時がきます。そのとき、「互いにとって“善い”こと」を訴える、ほんとうの訴えが生まれるのです。それを出し合い、聴き合うようになれば、あるとき、「自分は“善くなっている”こと」に気づくでしょう。

教師というのは、そのときがいつか来ることを願い、待ち、それが訪れたときに喜び合う、そういう「傍らの人」なのです。